

## 第五幕

# 心をはぐくむ演劇教育

七尾でしか学べないことがある

表現方法や制作活動といった演劇の要素を用いて、健やかな心と体を育てる「演劇教育」。

旧中島町から七尾市へと受け継がれているその取り組みによって、たくさんの方が若者が生きる力と目標を見つけている。今も現場で指揮を執る担当教諭の目からその軌跡を振り返ってみたい。

俳優、仲代達矢氏と旧中島町の奇跡ともいえる出会いから始まった、演劇による町づくり。その構想の中には、能登演劇堂を活動拠点とした、新しい町民文化活動の創出も盛り込まれており、「地元の学校で生徒に演劇を」という機運が高まったのも、今となれば自然な流れだったのかもしれない。旧中島高校の卒業生で、能登各地で国語教諭をしていた酒井が母校に赴任したのは、能登演劇堂が完成した平

成7年。「授業で演劇を教えるのはいい。条件は生徒を縛らないこと」。恩師でもある校長が酒井に伝えたのはこれだけだった。

確かに、高校・大学時代に演劇部員として活動した。教師としてのキャリアもある。しかし、授業として演劇を教えるとなると話は別だ。暗中模索を続ける日々―当時、全国の公立高校で唯一演劇科があった兵庫県立宝塚北高校へ視察に出かけたのは、まさにそんな時だった。

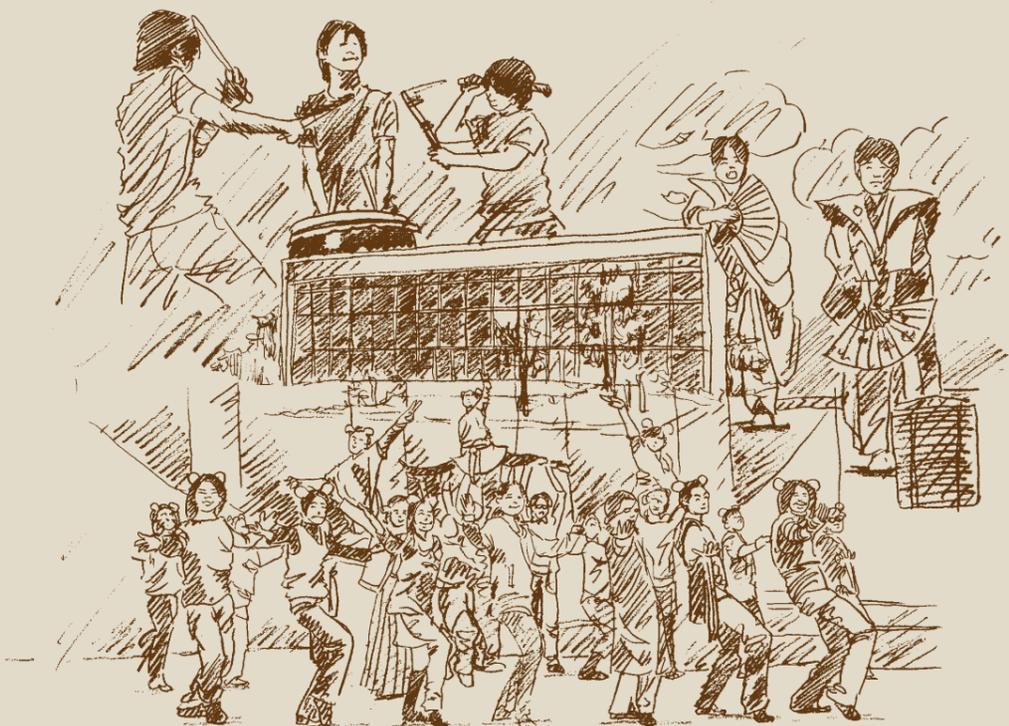
後の生徒たちを送り出し、平成21年、新たな演劇教育の場としてひと足早く動き出していた七尾東雲高校演劇科に赴任した。

演劇コースは1クラス。毎年約30名の生徒が集まってくる。専門学科とはいってもすべての生徒が演劇への意欲が高いとは言いがけない。なかにはさまざまな悩みを抱えたまま高校生になった者もいる。そんな生徒が机を並べるのだ。協調などあったものではない。しかし酒井は、どれだけ生徒が反目し合っても、できるだけクラス単位で行動させた。「苦手な人や嫌いな人から逃避するのは、社会に出た時また自分の殻に閉じこもってしまう。一緒に過ごすことで互いに理解する方法を見つけさせた」。そんな思いを持っていた。さらに演劇の授業では全員に役を与え、自分がいないと舞台が成立しないこと、必要とされていることを実感させた。居場所を見つけた生徒たちには笑顔が増え、欠席数は激減。友人や教師との交流が増えることに、人と

自分は同じではない。違っているのだということに気付き、自分らしさを取り戻していった。

ある理由から学校を、教師を、親を憎んだまま入学してきた女子生徒は、卒業時のパーティーで「学校が大好きになった」と大粒の涙をこぼし、もっと勉強したいと4年制大学に進学した。また、いつも教室の隅で一人ポツンと過ごすことが多かった男子生徒は、演劇を通してやれればできるという自信をつけ販売員として就職。北陸で一番の売り上げを取めた。人が嫌いだと心の扉を閉ざした多くの生徒が、人と接することの大切さを知り、看護師や保育士といった人と正面から向き合う仕事を選ぶ。どんどん変わっていく生徒の様子を間近で見るのが、酒井の何よりの喜びだ。

地域に能登演劇堂がある。ここにも大きな意味がある。仲代達矢氏が率いる無名塾のホームグラウンドになっている舞台を実習の場にできることだ。通常、予算



役になりきってセリフを言い合ったり、体を動かしてゲームをしたり。心の底から楽しそうに遊ぶ生徒の姿に、目からウロコがポロポロと剥がれ落ちた。さらに、能登演劇堂公演に出演していた俳優たちを訪ね、演劇についての教えを乞ううちに、酒井はある一つの答えに辿り着く。「演劇と演劇教育は似て非なるもの。俳優養成はできないが、生徒の閉じた心の殻を打ち破る授業ならできるかもしれない」。

平成12年4月、旧中島高校に普通科演劇コースが開設された。入学式には能登演劇堂の名誉館長でもある仲代達矢氏が駆け付け、共に一期生と演劇コースの門出を祝った。そして平成16年、七尾市、田鶴浜町、中島町、能登島町の合併により、演劇教育は七尾市に継承される。酒井は中島高校演劇コースの最行政など周囲の理解とバックアップにある。逆の見方をすれば、演劇文化が根付く七尾という町が一体となって、生徒たちの成長を支えてきたのだ。

運命の出会いからもたらされた演劇が、町の文化となり、やがて次世代を担う若者に生きる力と勇気を与える場所をつくった。演劇教育が続く限り、七尾を心のよりどころとする生徒は増え続けるだろう。町が人を育てる。こんなに誇らしいことがあるだろうか。

やスケジュール上、公立高校がホールを借用できるのはリハーサルを含め約3日。正直、こんな短期間では、会場の雰囲気や広さをつかむだけで初日を迎えてしまう。しかし、能登演劇堂は1週間から10日ほど、学生が存分に稽古できるよう予定を空けてくれる。どんな動きをすれば、どれだけの声を出せば観客に届くのかを考えながら、「やれるだけのことはやった」と思えるほど練習ができるから、生徒たちは幕引きと同時に大きな達成感を手にする。一方で演技に自信を持つ生徒も、無名塾に所属する俳優たちとの交流から、努力と勉強を続けても第一線で活躍できるのはほんの一部だけという厳しい現実を感じ取る。生徒たちは演劇を通してさまざまな体験を重ねながら人間的に成長し、やがて誰に指示されることもなく、これから自分が進むべき道を探し始める。

地域のイベントに数名の生徒と参加した時のことだった。海岸沿いを車で走っていると、「先生、

海だ！海！初めて見た！」。県外出身の生徒が目を見張らせた。また、日暮れの帰り道で不意に空を見上げ、「こんなきれいな月、見たことない」とつぶやいた生徒もいた。手つかずの自然、澄んだ空気、のどかな景色、心温かな人々。七尾のすべてがここでしかない演劇教育につながっている。例え卒業して七尾を離れることになっても、生徒たちは社会で生きていくための心と体を育ててくれた。第二の故郷を決して忘れないだろう。事実、能登演劇堂には公演ごとに伴侶や家族と共に卒業生が訪れる。特別な言葉はなくても、酒井にはその晴れやかな顔を見れば分かる。「自分の力で人生を切り拓いたんだな。頑張っているんだな。そして思う。10年、20年先も、彼らがいずれも帰って来られる能登演劇堂でありますように。七尾が大切な人に見せたいと思う町でありますように」。

七尾の演劇教育の素晴らしさは、能登演劇堂や下宿生を受け入れてくれる市民、地域住民、



制作協力  
酒井 藤雄さん

石川県立  
七尾東雲高等学校  
演劇教育・国語担当教諭  
旧中島高等学校OB